

②② 正規回帰の有意性検定について

秋田大学学芸学部 宮澤 光一

y を正規分布 $N(\sum_{v=1}^k x_v a_v, \sigma^2)$ に従って分布する確率変数とす。こゝに、 a_v, σ は未知の parameter, x_v は確変変数なり。 ($v = 1, 2, \dots, k$)。

この母集団からとつた大きさ $n (\geq k)$ の標本を下とす。

$$(y_1 | x_{11} a_1 + x_{12} a_2 + \dots + x_{1k} a_k)$$

$$(y_2 | x_{21} a_1 + x_{22} a_2 + \dots + x_{2k} a_k)$$

⋮

$$(y_n | x_{n1} a_1 + x_{n2} a_2 + \dots + x_{nk} a_k)$$

今

$$Y = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix}, \quad X = \begin{pmatrix} x_{11} & x_{12} & \dots & x_{1k} \\ x_{21} & x_{22} & \dots & x_{2k} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ x_{n1} & x_{n2} & \dots & x_{nk} \end{pmatrix}, \quad A = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_k \end{pmatrix}$$

とおけば

$$E(Y) = XA$$

なり。

rank $X = k$ とし

$$\begin{vmatrix} x_{11} & x_{12} & \dots & x_{1k} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ x_{k1} & x_{k2} & \dots & x_{kk} \end{vmatrix} \neq 0$$

なる如く X の添字をつけるものとする。

y_1, y_2, \dots, y_n の確率要素は下なり。

$$dF(y_1, \dots, y_n) = \left(\frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} \right)^n e^{-\frac{\sum_{i=1}^n (y_i - \sum_{v=1}^k x_{iv} a_v)^2}{2\sigma^2}} dy_1 \dots dy_n \quad (1)$$

今、 a_1, a_2, \dots, a_k の中の r 個の parameter

a_{k-r+1}, \dots, a_k が特定の値 $a_{k-r+1} = a_{k-r+1}^0, \dots, a_k = a_k^0$

なりとの仮説 H_0 を検定せんとす。

このとき、次の定理が成立することを示すのが目的なり。

[定 理]

確率変数 (y_1, \dots, y_n) に適当な一次変換を施して、

確率変数 (z_1, \dots, z_n) にかえることにより

$$S^2 = \sum_{i=1}^n \left(y_i - \sum_{v=1}^k x_{iv} a_v \right)^2 \quad (2)$$

を

$$S^2 = \sum_{i=1}^k \left(z_i - \sum_{v=i}^k c_{iv} a_v \right)^2 + \sum_{i=k+1}^n z_i^2 \quad (3)$$

$$c_{ii} \neq 0 \quad (i=1, 2, \dots, k)$$

と表わすことが出来る。こゝに

各 z_i は互に独立にして、 (4)

$$\left. \begin{aligned} E(Z_i) &= \sum_{v=1}^K c_{iv} a_v \quad (i=1, 2, \dots, K) \\ E(Z_i) &= 0 \quad (i=K+1, \dots, n) \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

$$Z_i \text{ の variance は } \sigma^2 \quad (i=1, 2, \dots, n) \quad (6)$$

をもつて正規分布をする確率変数なり。

而もこの一次変換の行列は符号を除いて一意に X から定まる。

この定理から直ちに次の系が得られる。

[系]

a_1, a_2, \dots, a_K を任意に動かして得られる S^2 の最小値 (absolute minimum) を S_a^2 , $a_{K-r+1}^0, \dots, a_K^0$ は固定し, a_1, \dots, a_{K-r} を任意に動かして得られる S^2 の最小値 (relative minimum) を S_r^2 ($\geq S_a^2$) とし,

$$S_r^2 = S_a^2 + S_b^2$$

とおくとき, S_a^2/σ^2 と S_b^2/σ^2 とは, 互に独立に, 夫々自由度 $(n-k)$ 及び自由度 r の χ^2 -分布をする。

従つて F -分布を用いて假説 H_0 を検定出来る。

[系の証明]

定理が成立するとすれば, (3)をみて, S_a^2 は, (3)の右辺の第一項を最小にするように A をとることによつて得られる。

それには, $c_{ii} \neq 0$ なる故

$$a_K = Z_K c_{KK}^{-1}$$

$$a_{K-1} = (Z_{K-1} - c_{K-1,K} a_K) c_{K-1,K-1}^{-1}, \text{ etc.}$$

ととるとき、(3)の右辺の第一項は0となつて

$$S_a^2 = \sum_{i=K+1}^n Z_i^2$$

を得る。而も各 Z_i ($i = K+1, \dots, n$) は、互に独立に、平均値0、標準偏差 σ なる正規分布をする故、 S_a^2/σ^2 は自由度 $(n-K)$ の χ^2 -分布をする。

次に、 S_r^2 を求めるには、仮設 H_0 の下では、(3)の第一項は

$$\sum_{i=1}^{K-r} \left(Z_i - \sum_{v=i}^{K-r} c_{iv} a_v - \sum_{\mu=K-r+1}^K c_{i\mu} a_\mu^0 \right)^2 + \sum_{i=K-r+1}^K \left(Z_i - \sum_{v=i}^K c_{iv} a_v^0 \right)^2$$

となる故に、 S_r^2 は、この第一項を0ならしめるように、 a_1, \dots, a_{K-r} をとることによつて得られ

$$S_r^2 = \sum_{i=K-r+1}^K \left(Z_i - \sum_{v=i}^K c_{iv} a_v^0 \right)^2 + \sum_{i=K+1}^n Z_i^2$$

となる。よつて

$$S_b^2 = \sum_{i=K-r+1}^K \left(Z_i - \sum_{v=i}^K c_{iv} a_v^0 \right)^2$$

こゝに各 Z_i ($i = K-r+1, \dots, K$) は互に独立に、平均値 $\sum_{v=i}^K c_{iv} a_v^0$ 、標準偏差 σ の正規分布をする故、 S_b^2/σ^2 は、自由度 r の χ^2 -分布をする。

又、 Z_i ($i = 1, \dots, n$) は互に独立なる故、 S_a^2 と S_b^2 が互に独立なることは当然なり。 q. e. d.

(定理の証明)

次の形の行列

$$B = \begin{pmatrix} b_{11} & \dots & b_{1,k+1} & \dots & b_{1n} \\ \vdots & & & & \\ b_{k1} & \dots & b_{k,k+1} & \dots & b_{kn} \\ b_{k+1,1} & \dots & b_{k+1,k+1} & 0 & \dots & 0 \\ b_{k+2,1} & \dots & & b_{k+2,k+2} & 0 & \dots & 0 \\ \vdots & & & & & & \vdots \\ b_{n1} & \dots & & & & & b_{nn} \end{pmatrix}$$

をとつて、 Y に一次変換を施して、

$$BY = Z = \begin{pmatrix} z_1 \\ z_2 \\ \vdots \\ z_n \end{pmatrix}$$

と変える。

このとき、 Z が次の条件を満たすように、 B が符号を除いて、一意に X から求まることを示さん。

$$[1] \quad \varepsilon(Z) = CA$$

こゝに、 C は次の形の n 行 K 列の行列なり

$$C = \begin{pmatrix} c_{11} & c_{12} & \dots & c_{1K} \\ 0 & c_{22} & \dots & c_{2K} \\ \vdots & & & \vdots \\ 0 & \dots & 0 & c_{KK} \\ 0 & \dots & \dots & 0 \\ \vdots & & & \vdots \\ 0 & \dots & \dots & 0 \end{pmatrix}, \quad c_{ii} \neq 0 \quad (i=1, 2, \dots, K)$$

これは、定理の (5) にあたる。

$$[2] \quad E(Z_i) = \alpha_i \quad \text{とおくとき}$$

$$E(Z_i - \alpha_i)^2 = \sigma^2 \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

これは、定理の(6)にあたる。

$$[3] \quad E\{(Z_i - \alpha_i)(Z_j - \alpha_j)\} = 0, \quad i \neq j$$

$$(i, j = 1, 2, \dots, n)$$

各 Z_i は、 y_i の一次結合として正規分布をなす故に、この条件は定理の(4)にあたる。

Z が上の三条件を満すようにすることは、行列 B が次の条件を満すように定めることと同値である。

$$E(Z) = E(BY) = B E(Y) = B X A$$

なる故、条件 [1] の $E(Z) = CA$ が成立つためには、

$$B X A = C A$$

が、 A の如何にかかわらず成立すべき故

$$B X = C \quad (7)$$

なることである。次に、

$$\begin{aligned} E\{(Z_i - \alpha_i)(Z_j - \alpha_j)\} &= E\left\{\left\{\sum_{\nu=1}^n b_{i\nu}(y_\nu - E(y_\nu))\right\}\left\{\sum_{\mu=1}^n b_{j\mu}(y_\mu - E(y_\mu))\right\}\right\} \\ &= E\left\{\sum_{\nu=1}^n b_{i\nu} b_{j\nu} (y_\nu - E(y_\nu))^2\right\} \\ &\quad + \sum_{\nu \neq \mu} (b_{i\nu} b_{j\mu} + b_{i\mu} b_{j\nu}) E\{(y_\nu - E(y_\nu))(y_\mu - E(y_\mu))\} \\ &= \sigma^2 \sum_{\nu=1}^n b_{i\nu} b_{j\nu} \end{aligned}$$

よつて、条件 [2] は、

$$\sigma^2 \sum_{\nu=1}^n b_{i\nu}^2 = \sigma^2$$

即ち、
$$\sum_{\nu=1}^n b_{i\nu}^2 = 1 \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$

となることであり、

条件 [3] は、
$$\sigma^2 \sum_{\nu=1}^n b_{i\nu} b_{j\nu} = 0 \quad (i \neq j)$$

即ち
$$\sum_{\nu=1}^n b_{i\nu} b_{j\nu} = 0 \quad (i \neq j; i, j = 1, 2, \dots, n)$$

となることである。

こゝに、 $b_{i\nu} = 0$ for $i = k+1, \dots, n-1, \nu = i+1, \dots, n$ なることは勿論なり。

かくして、条件 [2], [3] は、

$$BB' = E \quad (B' \text{ は } B \text{ の転置行列を表す。}) \quad (8)$$

なること、即ち、 B が直交行列なことである。

よつて、 Z が上の三条件を満すようにはするに、変換行列 B が (7), (8) を満すようには、 X から定められぬは宜しい。

そこで (7) の左から辺々 B' を乗すれば

$$B'C = X$$

となる。

これを詳しく書いてみれば、次の如し

$$\begin{pmatrix} b_{1,1} & \dots & b_{k,1} & b_{k+1,1} & b_{k+2,1} & \dots & b_{n,1} \\ b_{1,2} & & b_{k,2} & b_{k+1,2} & b_{k+2,2} & & b_{n,2} \\ \vdots & & \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ b_{1,k+1} & & b_{k,k+1} & b_{k+1,k+1} & b_{k+2,k+1} & & b_{n,k+1} \\ b_{1,k+2} & & b_{k,k+2} & 0 & b_{k+2,k+2} & & b_{n,k+2} \\ \vdots & & \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ b_{1,n} & \dots & b_{k,n} & 0 & 0 & \dots & 0 & b_{n,n} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} c_{11} & c_{12} & \dots & c_{1k} \\ 0 & c_{22} & & c_{2k} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & \dots & 0 & c_{kk} \\ 0 & & & 0 \\ \vdots & & & \vdots \\ 0 & & & 0 & & & 0 \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} x_{11} & x_{12} & \cdots & x_{1k} \\ x_{21} & x_{22} & \cdots & x_{2k} \\ \vdots & \cdot & & \\ x_{n1} & x_{n2} & \cdots & x_{nk} \end{pmatrix} \quad \text{なり} \quad (9)$$

$$\text{今, } B_i = \begin{pmatrix} b_{i1} \\ b_{i2} \\ \vdots \\ b_{in} \end{pmatrix} \quad (i=1, 2, \dots, k); \quad B_{k+i} = \begin{pmatrix} b_{k+i, 1} \\ b_{k+i, 2} \\ \vdots \\ b_{k+i, ki} \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \quad (i=1, 2, \dots, n-k)$$

} (n-k-l) 行

$$X_i = \begin{pmatrix} x_{1i} \\ x_{2i} \\ \vdots \\ x_{ni} \end{pmatrix}, \quad (i=1, 2, \dots, k)$$

とおく。 然るとき、次が成立す。

[Lemma 1]

B_1, B_2, \dots, B_k は

$$\left. \begin{aligned} B_1 &= \alpha_{k1} X_1 \\ B_2 &= \alpha_{21} X_1 + \alpha_{22} X_2 \\ &\vdots \\ B_k &= \alpha_{k1} X_1 + \alpha_{k2} X_2 + \cdots + \alpha_{kk} X_k \\ \alpha_{ii} &\neq 0 \quad (i=1, 2, \dots, k) \end{aligned} \right\} \quad (10)$$

の形に定まり、 α_{ij} 及び行列 C の各要素 C_{11}, \dots, C_{1k} ;

$$C_{22}, \dots, C_{2k}, \dots, C_{kk}, \quad (C_{ii} \neq 0 \text{ for } i=1, 2, \dots, k)$$

は、與之られた X から符号を除いて一意に定まる。

(証明)

帰納法で証するため、先づ B_1 を求めん。

そのため (9) の掛算を実行して両辺の第一列を比較すれば

$$C_{11} B_1 = X_1 \quad (11)$$

なことをみる。

而して $\text{rank } X = k$ なる故 $X_1 \neq 0$ として、従つて

$$C_{11} \neq 0$$

$$\therefore B_1 = C_{11}^{-1} X_1, \quad \therefore B_1' = C_{11}^{-1} X_1'$$

これを辺々掛け算をして、 B が直交行列なるべき故

$B_1' B_1 = 1$ なことを用いて、

$$C_{11}^{-2} X_1' X_1 = B_1' B_1 = 1$$

$$\therefore C_{11}^2 = X_1' X_1$$

$\therefore C_{11}$ は符号を除いて

$$C_{11} = \sqrt{X_1' X_1}$$

と定まる。

これを (11) に代入して、

$$B_1 = \frac{1}{\sqrt{X_1' X_1}} X_1$$

即ち、 $B_1 = \alpha_{11} X_1$

$$\therefore \alpha_{11} = \frac{1}{\sqrt{X_1' X_1}} \neq 0$$

と定まる。 次は

$$B_1 = \alpha_{11} X_1$$

$$B_2 = \alpha_{21} X_1 + \alpha_{22} X_2$$

$$\vdots$$

$$B_l = \alpha_{l1} X_1 + \alpha_{l2} X_2 + \dots + \alpha_{ll} X_l \quad ; (l \leq k-1),$$

$$\alpha_{ii} \neq 0 \quad (i = 1, 2, \dots, l)$$

且つ, $B_i' B_i = 1, B_i' B_j = 0 \quad (i \neq j; i, j = 1, 2, \dots, l)$
 なる如くは $\alpha_{ij},$ 及び $C_{11}, C_{12}, \dots, C_{1l}; C_{22}, \dots, C_{2l};$
 $\dots; C_{ll} \quad ; \quad C_{ii} \neq 0 \quad (i = 1, 2, \dots, l)$

が符号を除いて一意に X から求まつたとき, B_{l+1} が

$$B_{l+1} = \alpha_{l+1,1} X_1 + \alpha_{l+1,2} X_2 + \dots + \alpha_{l+1,l+1} X_{l+1} \quad ; \quad \alpha_{l+1,l+1} \neq 0$$

の形で, $B_{l+1}' B_1 = B_{l+1}' B_2 = \dots = B_{l+1}' B_l = 0, B_{l+1}' B_{l+1} = 1$

なる如くは $\alpha_{l+1,1}, \dots, \alpha_{l+1,l+1}$ 及び $C_{1,l+1}, C_{2,l+1}, \dots, C_{l+1,l+1} (\neq 0)$

が X から, 符号を除いて一意に定まることを示さん。

そのために, (9)の掛算を実行して, 両辺の第 $(l+1)$ 列を比較すれば

$$C_{1,l+1} B_1 + C_{2,l+1} B_2 + \dots + C_{l+1,l+1} B_{l+1} = X_{l+1} \quad (12)$$

なることをみる。

而して, B_{l+1} は, $B_{l+1}' B_{l+1} = 1, B_i' B_{l+1} = 0 \quad (i = 1, 2, \dots, l)$

なるべき故, (12)の両辺に左から

$$B_i' = \alpha_{i1} X_1' + \alpha_{i2} X_2' + \dots + \alpha_{ii} X_i' \quad (i = 1, 2, \dots, l)$$

を乗じて次を得る。

$$C_{i, l+1} = (\alpha_{i1} X_1' + \dots + \alpha_{il} X_l') X_{l+1} \quad (13)$$

$$(i = 1, 2, \dots, l)$$

又, (12) から,

$$\begin{aligned} C_{l+1, l+1} B_{l+1} &= X_{l+1} - C_{1, l+1} B_1 - C_{2, l+1} B_2 - \dots - C_{l, l+1} B_l \\ &= X_{l+1} - C_{1, l+1} \alpha_{11} X_1 - C_{2, l+1} (\alpha_{21} X_1 + \alpha_{22} X_2) \\ &\quad - \dots - C_{l, l+1} (\alpha_{l1} X_1 + \dots + \alpha_{ll} X_l) \end{aligned}$$

即ち $C_{l+1, l+1} B_{l+1} = \beta_1 X_1 + \beta_2 X_2 + \dots + \beta_l X_l + X_{l+1}$

と書ける。

而して, X_1, X_2, \dots, X_{l+1} は一次独立にして X_{l+1} の係数は 1 なる故

$$C_{l+1, l+1} \neq 0$$

なるべし。故に

$$B_{l+1} = C_{l+1, l+1}^{-1} (\beta_1 X_1 + \dots + \beta_l X_l + X_{l+1}) \quad (14)$$

よつて, C_{11} を定めたと同様にして, 符号を除いて

$$C_{l+1, l+1} = \left\{ (\beta_1 X_1 + \dots + \beta_l X_l + X_{l+1}) (\beta_1 X_1 + \dots + \beta_l X_l + X_{l+1}) \right\}^{\frac{1}{2}}$$

と求まる。これを (14) に代入すれば

$$B_{l+1} = \alpha_{l+1,1} X_1 + \dots + \alpha_{l+1, l} X_l + \alpha_{l+1, l+1} X_{l+1}$$

の形となり, $\alpha_{l+1, i}$ は, 一意確定で, $(i = 1, 2, \dots, l+1)$ 。

且つ, $\alpha_{l+1, l+1} = C_{l+1, l+1}^{-1} \neq 0$

なることを知る。

かくて, Lemma 1 が, 証された。 q. e. d.

このとき, B_1, B_2, \dots, B_k の決定された形 (10) からみて,

$$D_i = \left| \begin{array}{cccc|cccc} b_{11} & b_{21} & \dots & b_{k1} & x_{11} & x_{12} & \dots & x_{1k} \\ b_{12} & b_{22} & \dots & b_{k2} & x_{21} & x_{22} & \dots & x_{2k} \\ \vdots & \vdots & & \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ b_{1k} & b_{2k} & \dots & b_{kk} & x_{k1} & x_{k2} & \dots & x_{kk} \end{array} \right| \neq 0$$

なることを知る。一般に

$$D_i = \left| \begin{array}{ccccccc} b_{11} & \dots & \dots & \dots & \dots & \dots & b_{1, k+i-1} \\ \vdots & & & & & & \vdots \\ b_{k1} & \dots & \dots & \dots & \dots & \dots & b_{k, k+i-1} \\ \vdots & & & & & & \vdots \\ b_{k+1, 1} & \dots & b_{k+1, k} & 0 & \dots & 0 & \\ \vdots & & & & & & \vdots \\ b_{k+i-1, 1} & \dots & \dots & \dots & \dots & 0 & b_{k+i-1, k+i-1} \end{array} \right|$$

とおくとき次が成立す。

[Lemma 2]

$$B_{k+i} \quad (i = 1, 2, \dots, n-k) \quad \text{が}$$

$$B'_{k+i} B_1 = B'_{k+i} B_2 = \dots = B'_{k+i} B_{k+i-1} = 0, \quad B'_{k+i} B_{k+i} = 1$$

且つ D_1, D_2, \dots, D_i は何れも 0 ならず

且つ $b_{k+i, k+i} \neq 0$

なる如く、符号を除いて、一意に X から求まる。

(証明)

先づ B_{k+1} を求めん。

$$\left. \begin{array}{l} B'_{K+1} B_1 = 0 \text{ より } b_{K+1,1} b_{11} + b_{K+1,2} b_{12} + \dots + b_{K+1,K} b_{1K} = -b_{K+1,K+1} b_{1,K+1} \\ B'_{K+1} B_2 = 0 \text{ より } b_{K+1,1} b_{21} + b_{K+1,2} b_{22} + \dots + b_{K+1,K} b_{2K} = -b_{K+1,K+1} b_{2,K+1} \\ \vdots \\ B'_{K+1} B_K = 0 \text{ より } b_{K+1,1} b_{K1} + b_{K+1,2} b_{K2} + \dots + b_{K+1,K} b_{K,K} = -b_{K+1,K+1} b_{K,K+1} \end{array} \right\}$$

これを, $b_{K+1,1}, \dots, b_{K+1,K}$ に関する K 個の連立方程式と考えれば

その行列式は, $D_1 \neq 0$ なる故

$b_{K+1,1}, \dots, b_{K+1,K}$ について解くことが出来, その解は,

$$b_{K+1,i} = \gamma_i b_{K+1,K+1} \quad (i = 1, 2, \dots, K)$$

の形をとる。 γ_i は X から定まる常数なり

よつて,

$$1 = \sum_{i=1}^{K+1} b_{K+1,i}^2 = \left(\sum_{i=1}^K \gamma_i^2 + 1 \right) b_{K+1,K+1}^2$$

従つて又, $b_{K+1,i} (i = 1, 2, \dots, K)$ も一竟に求まる。

次に,

$B_{K+1}, B_{K+2}, \dots, B_{K+l} (l < n-k)$ が条件を満す如く求ま

り, 且つ $D_1 \cdot D_2 \cdot \dots \cdot D_l \neq 0$ なる如く定まつたとして,

B_{K+l+1} を求めん。

$$B'_{K+l+1} B_1 = 0, B'_{K+l+1} B_2 = 0, \dots, B'_{K+l+1} B_{K+l} = 0$$

より, 次の $(k+l)$ 個の方程式を得る。

$$\begin{cases}
 b_{k+l+1,1} b_{11} + b_{k+l+1,2} b_{12} + \dots + b_{k+l+1,k+l} b_{1,k+l} = -b_{k+l+1,k+l+1} b_{1,k+l+1} \\
 b_{k+l+1,1} b_{k1} + b_{k+l+1,2} b_{k2} + \dots + b_{k+l+1,k+l} b_{k,k+l} = -b_{k+l+1,k+l+1} b_{k,k+l+1} \\
 b_{k+l+1,1} b_{k+1,1} + b_{k+l+1,2} b_{k+1,2} + \dots + b_{k+l+1,k+l} b_{k+1,k+l} = 0 \\
 b_{k+l+1,1} b_{k+2,1} + b_{k+l+1,2} b_{k+2,2} + \dots + b_{k+l+1,k+l} b_{k+2,k+l} = 0 \\
 \vdots \\
 b_{k+l+1,1} b_{k+l,1} + b_{k+l+1,2} b_{k+l,2} + \dots + b_{k+l+1,k+l} b_{k+l,k+l} = 0
 \end{cases}$$

これを $b_{k+l+1,i}$ ($i=1,2,\dots,k+l$) に関する方程式と考へて解かんば、この連立方程式の行列式は下なり。

$$D_{l+1} = \begin{vmatrix}
 b_{11} & \dots & b_{1,k+l-1} & b_{1,k+l} \\
 b_{k1} & \dots & b_{k,k+l-1} & b_{k,k+l} \\
 b_{k+1,1} & \dots & b_{k+1,k+l} & 0 \\
 b_{k+l-1,1} & \dots & b_{k+l-1,k+l-1} & 0 \\
 b_{k+l,1} & \dots & \dots & b_{k+l,k+l}
 \end{vmatrix}$$

今、 D_{l+1} の第 $(k+l)$ 列に $b_{k+l,k+l}$ を乗じて、 $b_{k+l,k+l} D_{l+1}$ を作り、こゝで、第一列に $b_{k+l,1}$ を、第二列に $b_{k+l,2}$ を、---、第 $(k+l-1)$ 列に $b_{k+l,k+l-1}$ を乗じて、何れも第 $(k+l)$ 列に加へれば、第 $(k+l)$ 列にたゞ $(k+l)$ 個の数値は、

$$B'_{k+l} B_1 = 0, B'_{k+l} B_2 = 0, \dots, B'_{k+l} B_{k+l-1} = 0, \text{ 及び } B'_{k+l} B_{k+l} = 1$$

なり。よつて次を得る。

$$b_{k+l, k+l} D_{l+1} = \left| \begin{array}{ccc|c} & & D_l & 0 \\ & & & \vdots \\ & & & 0 \\ \hline b_{k+l, 1} & \dots & b_{k+l, k+l-1} & 1 \end{array} \right| = +D_l \text{ or } -D_l$$

而して、 $D_l \neq 0$ なる故

$$D_{l+1} \neq 0$$

よつて、上の連立方程式から、 $b_{k+l+1, i}$ ($i=1, 2, \dots, k+l$) が定まり、その解は次の形なり

$$b_{k+l+1, i} = \delta_i \cdot b_{k+l+1, k+l+1} \quad i=1, 2, \dots, k+l$$

こゝに δ_i は、 X から定まる常数なり。

而して

$$b_{k+l+1, 1}^2 + \dots + b_{k+l+1, k+l+1}^2 = 1$$

なることを用いて、前と同様にして、

$b_{k+l+1, i}$ ($i=1, 2, \dots, k+l+1$) が符号を除いて一意に定まり、且つ $b_{k+l+1, k+l+1} \neq 0$ なり。

即ち、 B_{k+l+1} が条件に通ずる如くに一意に定まる。よつて帰納法により Lemma 2 が証された。 *q. e. d.*

かくして、Lemma 1, 2. により、求める行列 B 及び C は符号を除いて一意に X から定まり、この直交行列 B を用いて、

$Z = BY$ と変換すれば

$$\begin{aligned} S^2 &= \sum_{i=1}^n \left(y_i - \sum_{v=1}^k x_{iv} a_v \right)^2 \\ &= (Y - XA)'(Y - XA) = (Y - XA)' B' B (Y - XA) \\ &= (BY - BXA)'(BY - BXA) \\ &= (Z - CA)'(Z - CA) \end{aligned}$$

$$= \sum_{i=1}^k (z_i - \sum_{v=i}^k c_{iv} a_v)^2 + \sum_{i=k+1}^n z_i^2$$

而も Z_i 'S が、定理の條件を満すことは、上の過程から明かなり。
 よつて、定理が証明された。